

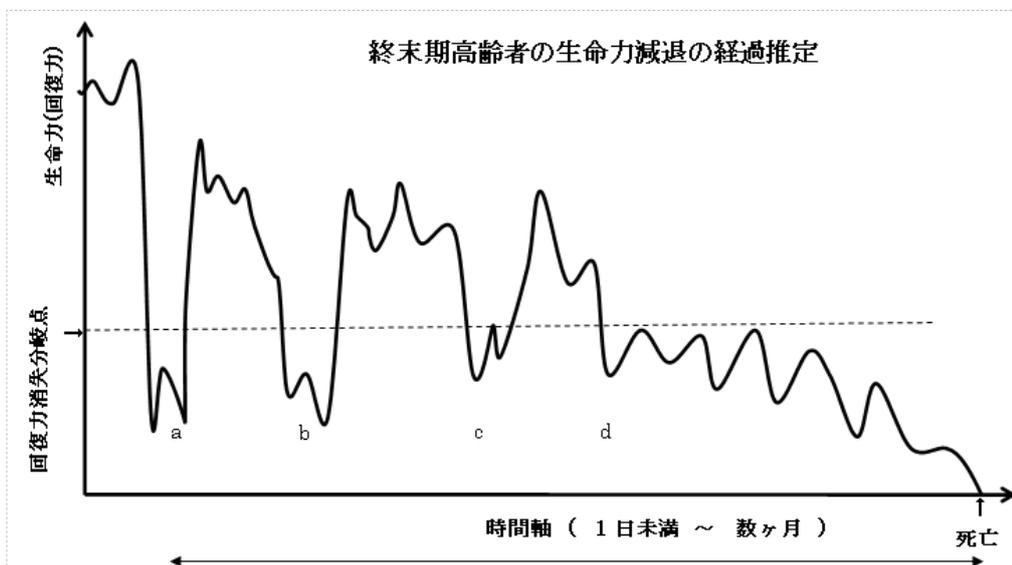
## 限りある命の不確定性と看取り対応について②

先月の続きのお話です。

この一羊館にはいつ急変してもおかしくない病気を沢山かかえながら過ごしている方々もいらっしゃいます。リハビリして元気になって帰る方もいれば入所の時点で終末期に近い方なども幅広くいらっしゃいます。短くとも長くともその命の価値の軽重には変わりはありません。特別扱いにしてもどうにもなりません。

QOLというのはその人らしく生きるということですが、言い方をかえればその人らしく死ぬということでもあります。QODといいます。

その生きている間こそ安心・満足を味わって頂かなくてはなりません。慌てず騒がず唯肅々と受け止めて行くのがご本人にとってもご家族にとっても必要な我々スタッフの心構えだと思います。論語の言う「あしたに道をきかば、ゆうべに死すともかなり」です。



### 高齢者の生命力のゆらぎの公理：

「衰弱しつつある生命力はゆらぎつつも、いつの日か回復し得ない分岐点を超えて死に向かう時期が必ずある」はずである。但し、上図の a 点なのか、b 点なのか、c 点、d 点なのかはだれも判らない。 → 従ってその時期の判断の正解は一つでは無く、複数あることが容認されます。

### 想定上の回復できない分岐点：

- ・看取り対応の開始時期？
- ・癌で言えば悪疫質症候群に陥ったとき？
- ・工夫しても REE が上昇し得ない段階に入った時？
- ・誤嚥リスク高度の時の経口摂取の止め時？
- ・補液を行う場合の終末期輸液量(200~500ml/日)の見極めは？
- ・一過性不整脈性心停止の場合の軽い心刺激は不要？
- ・介護者のメンタリティ：やりがいモチベーションの喪失、ネガティブ思考に陥り易い。

※一方で、ヒトはすべて「自分の命の限りを勝手に他人様に決めてもらいたくない」と思うのではないかと常に心の片隅に感じていると思う。

このような思いをすべて汲み取って私たちは「看取り対応」を現実に行っていることを認識致しましょう。

老人保健施設一羊館の理念  
利用者の方々すべてに尊厳・安心・満足を！

